

病害虫発生予察情報（9月予報）

令和元年8月28日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

| 作物名 | 病害虫名 | 予報 (9月の県平均平年値) | 予報の根拠 |
|----------|----------------|-------------------------|--|
| イネ | いもち病 (穂いもち) | 発生量：並 (発病株率 0.4%) | 8月上中旬の葉いもち発生量：多(+) 8月上中旬の穂いもち発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(+) |
| | 紋枯病 | 発生量：やや多 (発病株率 11.0%) | 8月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+) |
| | トビイロウンカ | 発生量：多 (寄生数 0.24 頭/株) | 8月上中旬発生量：やや多(+) 8月の成虫誘殺数：並~多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-) |
| | 斑点米カメムシ類 | 発生量：やや多 | 8月上中旬発生量：やや少(-) 8月の成虫誘殺数：並~多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-) |
| ダイズ | べと病 | 発生量：やや少 (発病株率 19.7%) | 8月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(+) |
| | ハスモンヨトウ | 発生量：並 (寄生株率 12.7%) | 8月中旬発生量：少(-) 8月の成虫誘殺数：並~多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-) |
| ウンシュウミカン | 黒点病 | 発生量：やや多 (発病度 0.7) | 8月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+) |
| | ミカンハダニ | 発生量：少 (寄生葉率 4.2%) | 8月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-) |
| | チャノキイロアザミウマ | 発生量：少 (寄生果率 0.1%) | 8月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-) |
| 中晩柑類 | かいよう病 | 発生量：やや多 (発病度 0.5) | 8月中下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：多い(+) |
| カキ | ハマキムシ類 | 発生量：やや少 | 8月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±) |

| 作物名 | 病虫害名 | 予報 (9月の県平均平年値) | 予報の根拠 |
|------|------------------|---|---|
| 果樹全般 | カメムシ類 | 発生量：多 | 8月1～4半旬誘殺数：少（－） スギ・ヒノキ寄生数：多（＋） ヒノキ毬果吸汁痕数：多（＋） スギ・ヒノキ毬果量：やや少（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（±） |
| チャ | 炭疽病 | 発生量：やや多 (病葉数 24.0 葉/1.25m ²) | 8月中旬発生量：やや多（＋） 気象予報：気温：高い（±） 降水量：多い（＋） |
| | チャノキイロ アザミウマ | 発生量：やや少 (叩き落とし虫数 5.7 頭/4 力所) | 8月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－） |
| | チャノミドリ ヒメヨコバイ | 発生量：並 (叩き落とし虫数 0.8 頭/4 力所) | 8月中旬発生量：やや少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－） |
| | チャノホソガ | 発生量：やや少 (巻葉数 1.7 葉/1.25 m ²) | 8月中旬発生量：少（－） 8月の成虫誘殺数：並～やや多（±） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－） |
| | ヨモギエダシャク | 発生量：多 (叩き落とし虫数 0.07 頭/4 力所) | 8月中旬発生量：やや多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（±） |
| | カンザワハダニ | 発生量：少 (寄生葉率 2.5%) | 8月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－） |
| | クワシロ カイガラムシ | 発生量：少 (寄生株率 2.1%) 発生時期：やや遅い | 8月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（±） 降水量：多い（－） |
| ネギ | 疫病 | 発生量：並 (発病株率3.8%) | 8月上旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋） |
| | 黒斑病・葉枯病 | 発生量：多 (発病株率4.2%) | 8月上旬発生量：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋） |
| | シロイチモジヨトウ | 発生量：やや少 (発病株率3.9%) | 8月上旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（±） |
| | ネギハモグリバエ | 発生量：やや少 (発病株率 42.0%) | 8月上旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－） |
| | ネギアザミウマ | 発生量：やや少 (発病株率 31.5%) | 8月上旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－） |

| 作物名 | 病害虫名 | 予報 (9月の県平均平年値) | 予報の根拠 |
|------------|-------------------------------|--------------------------------------|---|
| イチゴ | 炭疽病 | 発生量：多 (10月発病株率1.1%) | 8月上旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+) |
| | うどんこ病 | 発生量：並 (10月発病株率1.4%) | 8月上旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(±) |
| | ハダニ類 | 発生量：やや少 但し、中部は多 (10月寄生株率11.2%) | 8月上旬発生量：少(-) 但し、中部は多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±) |
| | ハスモンヨトウ | 発生量：やや多 (10月寄生株率0.7%) | 8月上旬発生量：並(±) 8月フェロモントラップ捕獲数：並～多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±) |
| キク (施設) | 白さび病 | 発生量：少 | 8月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(+) |
| | 黒斑・褐斑病 | 発生量：やや多 | 8月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+) |
| | えそ病 (トマト黄化えそ ウイルス：TSWV) | 発生量：やや多 | 8月中旬発生量：えそ病：並(±) 気象予報：気温：高い(+) |
| | アザミウマ類 | 発生量：やや多 | 8月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) |
| | ハダニ類 | 発生量：やや多 | 8月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) |
| 作物全般 | オオタバコガ | 発生量：多 | 8月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-) |

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【イネ】

<生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：8月1日～15日）では、草丈、稈長、穂長、茎数および葉色は概ね平年並であった。病害虫防除員からのアンケート調査によれば、地域によってばらつきはあるが、生育は概ね平年並である。

| | 田方 平坦地 | 東部 高冷地 | 志太榛原 | 中遠・西部 (普通期) | 中遠 (早期) |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 草丈 (cm) | 89.4 (91.6) | — — | 84.5 (89.6) | 81.1 (90.2) | 87.5 — |
| 稈長 (cm) | 73 (79.5) | 81.7 (80.8) | 72.9 (75.4) | 81.7 (80) | 83.9 (83.1) |
| 穂長 (cm) | 17 (17.4) | 19.5 (18.5) | 18.5 (18.1) | 19.3 (18.8) | 20.6 (18.8) |
| 茎数 (本) | 23.5 (22.6) | 20.8 (19.8) | 23.9 (20.2) | 24.8 (21.8) | 26.2 (21.8) |
| 葉色 (指数 1-7) | 4.2 (4.1) | 4.3 (3.9) | 3.6 (4.2) | 4.4 (4.1) | 4.3 (3.1) |

()内は平年値

※穂揃期前のは場は草丈、穂揃期以降のは場については稈長・穂長を計測した。

●いもち病（穂いもち）

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査では、県全体の葉いもちの平均発病株率は4.9%（平年1.3%）と平年より多い発生であり、特に中遠地域で多発していた（中遠地域の平均発病株率12.5%、平年3.0%）。このため、中遠地域に向けて、8月13日に穂いもちについて技術情報を発表した（<https://www.agri-exp.pref.sizuoka.jp/boujo/boujohp/gijyutsu/gijyutsu2019-1.pdf>）。
- ・8月上中旬の巡回調査では、穂いもちの発生は確認されなかった（平年発病株率0.5%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生をあまり助長しない（感染好適条件：気温15～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20～25℃を全て満たす時）。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・上位1～3葉に病斑が見られる場合は、穂いもちの伝染源となるので、適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。

- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・本県ではMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

●紋枯病

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は6.9%（平年7.6%）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・8月上中旬の巡回調査ではトビイロウンカの平均寄生数は0.08頭/株（平年0.04頭/株）と平年よりやや多かった。九州、中国及び四国地方の各県で注意報や警報が発表されており、本県においても飛来数は多いと予想される。
- ・7月第6半旬に、島田市と浜松市で本種の初誘殺が確認された。その他の地点では本種の誘殺は確認されていない。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温が平年より高いため、トビイロウンカの増殖をやや助長する。

防除対策

- ・9月の気温が高い場合には急増することがあるので注意する。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

- ・8月上中旬の水田におけるすくい取り調査では、18%の水田（平年29%）からアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ等が捕獲され、平均捕獲数は0.8頭/30回振り（平年1.1頭）と平年よりやや少なかった。
- ・8月第3半旬時点の県内3ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメとアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平年並～多く推移している。浜松市で誘殺数が多い。
- ・1か月予報では、9月の降水量は平年より多いが、気温が平年より高いため、斑点米カメムシ類の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。穂揃期とその7～10日後の2回薬剤散布を行うと効果が高い。
- ・ なお、農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稻のカメムシを防除する時期に多く、水稻のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報を図る等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html）を参照すること。

<その他の病害虫>

●コブノメイガ

- ・ 8月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は9.8%（平年2.6%）と平年より多かった。
- ・ 多発しているほ場では、斑点米カメムシ類の防除と併せて防除を実施する。

【ダイズ】

<生育の概況等>

長雨により播種がかなり遅れたため、生育は平年より遅い。

●べと病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率3.4%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病の発生をやや助長する（本病は15～20℃程度の比較的冷涼で雨の多いときに発生する）。

防除対策

- ・ 多発ほ場では薬剤防除を行う。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.4%（平年3.9%）と平年より少なかった。
- ・ フェロモントラップによる誘殺数は、平年並～多く推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温が平年より高いため、ハスモンヨトウの増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 食害（特に白化した葉）に注意してほ場を観察し、若齢幼虫を見つけ次第、薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●カメムシ類

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.4%（平年0.6%）と平年より少なかった。
- ・ ダイズには主にホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシが発生するが、近年、ミナミアオカメムシが増加傾向にある。ミナミアオカメムシの成虫は黄緑色で体長12-16mm、幼虫は黒褐色または黄緑色の体色に白や赤色の斑点を有する。ほ場内を観察し、寄生を確認した場合は薬剤防除を実施する。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況等>

生育は平年並の地域が多いが、4～7日程度遅い地域もある。

●黒点病

予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では、平均発病度は0.5（平年0.4）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・薬剤の散布間隔は前回の散布日から25～30日、または累積降雨量250～300mmを目安にして防除を行う。
- ・早生品種の防除は収穫前日数に注意する。
- ・アメダスの気象データを用いたシミュレーションによる各産地における要防除時期の予想については、病虫害防除所ホームページを参照。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では平均寄生葉率は5.3%（平年8.7%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報によると、気温は平年より高いが、降水量は多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・着色期以降に発生すると果実が着色不良となり、商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では寄生は見られなかった（平年0.1%）。果梗部被害度は0.9（平年1.6）、果頂部被害度は0.03（平年0.32）と平年より少なかった。
- ・1か月予報によると気温は高いが、降水量は多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・アメダスの気象データを用いて有効積算温度を計算したところ、第7世代成虫の発生ピークは9月中旬から10月中旬、第8世代成虫の発生ピークは10月上旬から11月中旬と予想される（発生ピーク時期は地域によって異なるため、各地域における成虫発生時期の予想については病虫害防除所ホームページを参照）。
- ・薬剤防除適期は各世代の発生ピーク7日前～当日である。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・普通温州園では寄生果率10%を目安に防除を行う。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、果実の平均発病度は0.8（平年0.4）、葉の発病度は0.3（平年0.6）であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 台風や長雨により感染が拡大する恐れがある。降雨後に散布しても、すでに感染した組織内の病原菌にはほとんど効果がないので、気象情報とほ場の発生状況に注意して降雨前の予防散布を行う。
- ・ 夏秋枝は罹病しやすく伝染源となるので、本病が多発している圃場では夏秋枝を切除する。

【カキ】

<生育の概況等>

生育はほぼ平年並である。

●ハマキムシ類

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では平均被害葉率は0.2%（平年1.5%）と平年より少なかった。
- ・ 西部地域のナシ園におけるフェロモントラップ調査でのハマキムシ類の誘殺数は、チャハマキは平年より少なく、チャノコカクモンハマキは平年より多かった。
- ・ 1か月予報によると降水量は平年より多いが、気温は高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップの調査を参考にし、適期防除（成虫発生盛期の10～14日後）に努める（誘殺データは病害虫防除所ホームページを参照）。

<その他の病害虫>

●フジコナカイガラムシ

- ・ 8月中旬の巡回調査では平均寄生果率は0.5%（平年2.1%）と平年より少なかった。
- ・ 本種は果実とヘタの間の薬剤が届きにくい所に寄生しているので、薬剤散布を丁寧に行う。

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

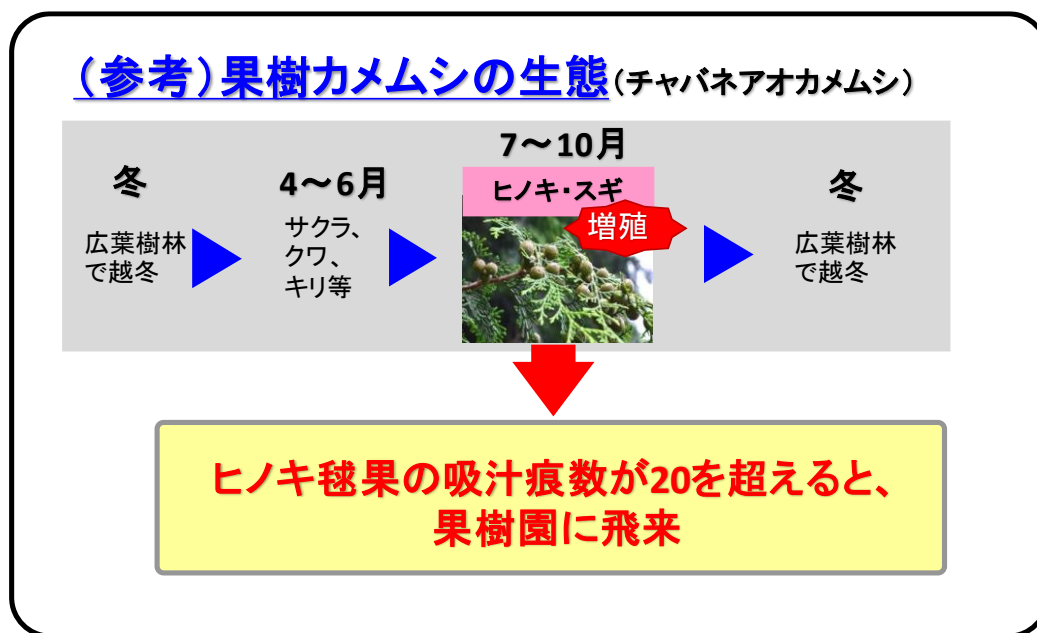
予報の根拠

- ・ 県内6カ所に設置しているフェロモントラップにおける8月第1～4半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが58.9頭/箇所（平年199.2頭）、ツヤアオカメムシは1.1頭/箇所（平年1.9頭）、クサギカメムシ1.5頭/箇所（平年1.9頭）と平年より少なかった。
- ・ 予察灯における8月第1～4半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが県平均で237.7頭/箇所（平年347.0頭/箇所）と平年より少なく、ツヤアオカメムシが72.0頭/箇所（平年56.9頭/箇所）と平年よりやや多かった。また、クサギカメムシは平年より多く誘殺される地域がみられた。

- ・繁殖場所であるスギ・ヒノキにおける8月中下旬のカメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）の平均寄生数は4.0頭（平年2.5頭）と平年より多かった。現時点において、カメムシ類はスギ・ヒノキに集中している状況と考えられる。
- ・カメムシ類の好適な餌であるヒノキ毬果において、毬果1個あたりのカメムシ類による吸汁痕数が20を超えると、スギ・ヒノキからカメムシ類が離脱し餌を求めて果樹園へ飛来する（下図参照）。8月中下旬におけるヒノキ毬果のカメムシ吸汁痕数は14.4（平年7.9）と平年より多く、9月には果樹園に飛来する可能性がある。
- ・7月上中旬のスギ、ヒノキの着果量指数は3.5（平年4.3）と平年よりやや少なかった。

防除対策

- ・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、病虫害防除所ホームページを参照する。
- ・スギ・ヒノキ林付近の果樹園では多発しやすいため、ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を行う。



【チャ】

<生育の概況等>

秋芽の生育は萌芽前～二葉開葉期と地域によりばらつきがある。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、新芽での平均発病葉数は24.8葉/1.25㎡(平年18.8葉/1.25㎡)で、平年よりやや多かった。しかし、調査地点50ヶ所中、平年より多かったのは全体の約1/4にあたる13カ所(26%)、その中で特に発病葉数が多く50.0葉/1.25㎡を超えていたのは7カ所(14%)であった。その一方、発病葉数が10.0葉/1.25㎡未満のほ場も31カ所(62%)と非常に多かった。以上より、本病が県全体で多かったのではなく、ほ場による発病差が大きいと判断された。さらに、発生程度別では、中発生が8.0%、少発生が74.0%で残り18.0%が無発生であり、甚発生・多発生は無かった。

また、2016年度以降、継続してDMI剤に対する感受性検定を行っているが、これまでに明らかな感受性菌は検出されていない。

以上を総合的に考えると、8月の巡回調査で平均発病葉数が平年よりやや多かったのは、調査ほ場の中に、無防除または散布適期を逃したほ場があったことが推定される。

- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は多いため、本病をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病の感染には、新芽生育期に降雨による胞子の飛散と10時間以上の葉の濡れが必要であり、本病の潜伏期間はおよそ20日と長い。秋芽生育初期に半日以上続く降雨があった場合には、早め(萌芽期～2葉期)に防除を行う。一方、生育中期以降に降雨があった場合は、たとえ感染しても秋冬番茶や秋の整枝作業で、新芽の上部は症状が出る前に刈られるので、防除の必要はない。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は8.4頭/4カ所(平年16.8頭/4カ所)で平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、発生状況を確認し、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は1.0頭/4カ所(平年1.5頭/4カ所)で平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、発生状況を確認し、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は1.0葉/1.25㎡（平年3.6葉/1.25㎡）で、平年に比べ少なかった。
- ・ フェロモントラップによる誘殺数は、平年並～やや多く推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、秋冬番茶を摘採する茶園では適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは病虫害防除所ホームページで提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.3頭/4カ所（平年0.1頭/4カ所）で平年よりやや多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 平年は9月に幼虫の発生が見られるが。本年はすでに幼虫が認められる。茶園内で局所的に発生するので茶園をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、茶株面の平均寄生葉率は0.4%（平年2.1%）で平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く降水量は平年より多いため、天敵のカブリダニ類の増殖に適している。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、天敵への影響が少ない薬剤を選択し、直ちに防除を行う。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.2%（平年10.2%）で平年より少なかった。
- ・ アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第3世代予想ふ化最盛日は、8月28日の計算によると平年より3日遅い9月18日と予想される。

防除対策

- ・ 地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については病虫害防除所ホームページで提供している。なお、7月に防除した茶園では、系統の異なる薬剤を使用して防除する。

<その他の病害虫>

●褐色円星病

- ・本病は、春先になって落葉が始まってからの防除では効果が無い。一番茶摘採期に発生が多かった茶園では、秋芽の生育期～硬化期に必ず1～2回防除する。

●赤焼病

- ・つゆひかり等の感受性品種では、春先に発病して枯死した枝に病原細菌が残存して越冬している。この菌が秋以降、台風等により増殖し冬の発病につながるため、台風による風雨の影響を受けた場合は通過後に薬剤散布を実施し菌密度を下げしておく。

●チャトゲコナジラミ

- ・8月中旬の巡回調査では、茶株裾面の平均寄生葉率は15.4%（平年27.2%：過去9年）で平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、発生をやや助長する。
- ・8月中旬に第3世代成虫が発生し始めた。成虫の発生が多い茶園では、9月初旬からの若齢幼虫期に防除を行う。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬剤が届くように散布する。防除前に裾刈を行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。なお、防除の際には、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。

●チャノホコリダニ

- ・8月中旬～9月にかけて乾燥が続くと、秋芽にチャノホコリダニが多発することがある。秋冬番茶を摘採する茶園では、発生に注意し、早めに防除する。

【トマト】

<その他の病害虫>

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

- ・1か月予報によると、気温は平年より高いため、ハウス内でのコナジラミ類の増加、黄化葉巻病の発生が懸念される。本病は生育初期に感染すると特に被害が著しいため、育苗期間中に感染が疑われる株が見られたら、定植せず取り除き、育苗期から体系的にコナジラミ類の防除を行うことが重要である。

【ネギ】

<生育の概況等>

降雨の影響により定植が遅れている地域がある。

●疫病

予報の根拠

- ・8月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率2.7%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する（病原菌生育適温28～30℃）。

防除対策

- ・多湿な環境で発生が多いため、例年発生が認められるほ場では、溝を切るなどしてほ場排水を良くする。
- ・窒素肥料の多用は本病を助長するため、施用量に気をつける。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・8月上旬の巡回調査では、上位3葉における平均発病株率が8.2%（平年発病株率3.8%）と、平年に比べ多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・肥料切れや草勢の衰えは発病を助長するので、適切に施肥を行う。
- ・風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除につとめる。
- ・薬剤防除は、治療剤に頼りすぎないように注意し、予防散布または初期防除につとめる。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・8月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発生株率2.1%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年9月に発生が増加することから、ほ場をよく観察し、薬剤感受性が高い若齢幼虫のうちに防除する。
- ・すでに発生が増加しているほ場では、早めに薬剤散布を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・8月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は13.2%（平年37.0%）で平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・近年、本虫の食害により葉が真っ白くなる被害が散見されている。多発すると生育が遅れるため、本種の発生に注意し早期に防除を行う。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・8月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.4%（平年37.6%）で平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・多発すると生育が遅れるため、発生が増加する前に防除を行う。すでに、発生が増加しているほ場では早めに防除を行う。
- ・本種はネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（IYSV）を伝搬する。罹病株はタマネギやエシャレット等、他のネギ類にも感染・発病するため、見つけ次第ほ場の外に持ち出し、土中に埋める等の処分をする。

【イチゴ】

＜生育の概況等＞

全体的には苗の生育は平年並である。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回では、平均発病株率は1.3%（平年0.9%：過去7年）と平年よりやや多い発生であった。また、病害虫防除員からの情報でも、発生は平年よりやや多いとのことであった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病原菌は水滴の飛散等により伝染するため、株元灌水するなどして、できるだけ水の跳ね返りがないようにする。
- ・ ほ場の見回りを徹底し、発病株（図1、2）や発病が疑われる株を見つけたら、培地（培土）も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて処分する。発病株や発病が疑われる株は、定植苗には使用しない。
- ・ 発病後の防除は困難であるため、発病前から定期的に予防散布を行う。特に激しい雨や台風の前、下葉除去など株を傷つけるような作業後は重点的に行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



図1 発病株（萎凋症状）



図2 発病株（斑点型病斑）

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では平均発病株率は4.6%（平年4.9%：過去8年）と平年並の発生であった。また、病害虫防除員からの情報では、発生は平年並～やや多いとのことであった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 高温期の発病は少ないが、特に6、7月に発生がみられたほ場では、育苗期から予防的に薬剤散布を行い、無病苗の定植に努める。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査における平均寄生株率は、東部地域では0.8%（平年5.1%：過去8年）、西部地域では1.3%（平年4.6%：過去8年）と平年より少ない発生であったが、中部地域では40.0%（平年15.8%：過去8年）と、平年より多い発生であった。また、病害虫防除員等からの情報では、平年並～やや多い発生であった。
- ・ 1か月予報では気温が平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 近年、本ほでの多発が続いていることから、育苗期の防除を徹底し、ハダニ類を本ほへ持ち込まないよう注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では平均寄生株率は0.1%（平年0.1%：過去8年）と平年並であり、平均被害株率は0.7%（平年2.7%：過去4年）と平年より少なかった。また、病害虫防除員等からの情報では、平年並～少ない発生であった。
- ・ フェロモントラップ調査によると8月第4半旬までの誘殺数は、県中部では平年より多く、県西部では平年並であった。
- ・ 1か月予報では降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 初期発生に注意し若齢のうちに防除を行う。施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

<その他の病害虫>

●コガネムシ類

- ・ 県西部の予察灯におけるコガネムシ類の誘殺数は、アオドウガネは平年並であり、ドウガネブイブイは平年並～多かった。
- ・ 例年発生がみられるほ場では、定植前に薬剤を本ほに土壌混和する。定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ほへ幼虫を持ち込まないように注意する。

【キク（施設）】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年値なし）。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（本病の発病適温17℃前後）。

防除対策

- ・ 9月の高温は本病の病原菌の生育に適さないが、初期防除を怠ると生育に好適な条件となる秋以降の防除が困難となるので、発生ほ場では初期防除に努める。
- ・ 発生ほ場、特に罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.0%であった（平年値なし）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病は特に多湿が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では手遅れとなるので、例年発生が見られるほ場では薬剤の予防散布を行う。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。また、土の上に落ちた被害葉は、伝染源となるため、ほ場に放置しない。

●えそ病（トマト黄化えそウイルス：TSWV）

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.3%であった（平年値なし）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるミカンキイロアザミウマの増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマは本ウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

●アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ）

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、平均被害株率は11.3%であった（平年値なし）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるアザミウマ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発生が認められた場合は、早期の防除を行う。
- ・ 開花期のキクは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、開花初期から発生に注意する。
- ・ 中～下位の葉裏を観察し、寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

●ハダニ類（ナミハダニ）

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では、雌成虫の寄生は3.5頭/10葉であった（平年値なし）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、ハダニ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 中～下位の葉裏を観察し、寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。ただし、薬剤抵抗性を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は平年より多く推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温が平年より高いため、オオタバコガの増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報（東海地方 令和元年8月22日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 8月24日から9月23日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

| 期間 | 要素 | 低・少 | 平年並 | 高・多% |
|-------|------|-----|-----|------|
| 1か月 | 気温 | 20 | 30 | 50 |
| 1か月 | 降水量 | 30 | 30 | 40 |
| 1か月 | 日照時間 | 40 | 30 | 30 |
| 1週目 | 気温 | 20 | 50 | 30 |
| 2週目 | 気温 | 20 | 40 | 40 |
| 3～4週目 | 気温 | 20 | 40 | 40 |

【予報の対象期間】

1か月 : 8月24日(土)～9月23日(月)
1週目 : 8月24日(土)～8月30日(金)
2週目 : 8月31日(土)～9月6日(金)
3～4週目 : 9月7日(土)～9月20日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

| |
|--|
| 静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html |
|--|